論　文

ブラジルにおける阿波おどりレプレーザ連の発展とその要因

萩原八郎・稲井由美

An Analysis of the Development of the Represa Awaodori Group in Brazil

Hachiro HAGIWARA and Yumi INAI

ABSTRACT

Awaodori, which is held in Tokushima every summer, attracts many tourists from all over the world. For the purpose of expanding this Tokushima's tourism resource more widely, the Tokushima Prefectural Government has held the Autumn Awaodori since 2008 every year, and during this autumn event in 2019 the first World Awaodori Summit was held at the ASTY Tokushima. In this opportunity, leaders of Awaodori associations in different places in Japan and Awaodori groups from various foreign countries gathered in Tokushima to share their experiences and exchange information and opinions.

The Represa-ren (Represa Awaodori Group), which is the oldest Awaodori group in the world outside Japan, was invited to this autumn event, as well as the other foreign groups, and two representatives of the group came to Tokushima from Brazil. Taking advantage of this opportunity, they prepared a presentation document about the group history and activities. In this paper, the authors present the history of the Represa-ren and analyze the meaning that Tokushima's traditional dance Awaodori has continued in Brazil. The Represa-ren is not only adopted but developed by the founders, successors and everyone related to this group's activities with each one's will and devotion.

KEYWORDS： Awaodori, Represa-ren, Japanese immigrants into Brazil, Japanese community in Brazil, Ethnic identity

はじめに

徳島市中心部で夏のお盆の時期に行われる阿波おどりには，毎年120万人以上の観光客が訪れている。2018年は，それまで累積４億円を超えていた赤字運営体制の立て直しを図ったが，南内町演舞場での総踊りの中止決定をめぐる騒動の影響もあり，前年比15万人減の108万人と過去最低を記録し，事業も約2900万円の赤字となった。2019年は運営を民間企業に委託する形をとって新たに臨んだが，阿波おどり期間後半に台風に見舞われたことが大きく影響し，事業は１億1300万円の大幅赤字を計上した。2020年も各演舞場の運営に新たな試みを加えて事業収支改善に努めている。

徳島市および徳島県にとって重要な観光資源である阿波おどりを国内外にさらに広め，発展させることを視野に，徳島県により2008年から「秋の阿波おどり」が毎年開催されている。2019年には同イベント期間中に，「阿波おどりを徳島から世界へ」と銘打って高円寺や南越谷など国内各地の阿波おどり団体やアメリカやフランスなど海外の阿波おどり連の代表者が集まる「世界阿波おどり

2019年11月30日受付，2020年２月19日最終受付
萩原八郎　四国大学経営情報学部
Hachiro HAGIWARA, Member (Faculty of Management and Information Science, Shikoku Univ. Tokushima, 771-1192 Japan)
稲井由美　四国大学文学部
Yumi INAI, Nonmember (Faculty of Literature, Shikoku Univ. Tokushima, 771-1192 Japan)
四国大学経営情報研究所年報　No. 25　pp. 1-10　2020年３月

サミット」が「アスティとくしま」で初めて開催された。

この機会に海外の阿波おどり連として最も古い歴史のあるブラジルのレプレーザ連も招待され，長井アメリア連長とベテランで指導的立場の中釜ユキエ連員が来日することになった。サミットの場でレプレーザ連の紹介を行うため，彼女たちは過去の出来事について関係者から聞き取りを行い，同連のこれまでの歴史を発表用の資料にまとめた。サミットを通じて世界各地で活動している連の代表者たちとそれぞれの連を取り巻く事情などの情報を交換し，インターネットで今後も連絡を取り合える関係を築いたことに加えて，徳島滞在中に有名連の「うきよ連」から直接鳴り物の手ほどきを受けるなどした。

本研究の目的は，このレプレーザ連設立から今日までの足跡を紹介するなかで，同連のように外国で日本の伝統芸能が継承されることの意義や連（グループ）が存続・発展してきた要因を考察することにある。なお，本稿では，徳島県のイベント「秋の阿波おどり」および徳島市や阿波市などでの夏の「阿波おどり」の例にならって「踊り」をひらがな表記する「阿波おどり」を主に使用する。

Ⅰ　ブラジルにおける阿波おどり

1）日本からブラジルへの移民

日本からブラジルへの移民は1908（明治41）年に始まり，第二次世界大戦までの33年間に約19万人，戦後に移住が再開された1952（昭和27）年以降に約５万人，累計で約24万人が移住している。今日，ブラジルの日系人口は，一世から六世まで約160万人に上るといわれる。ちなみに「日系人」とは，外務省領事局の『海外在留邦人数調査統計（2002年)』において「日本国籍を有する永住者，及び日本国籍を有しないが，日本人の血統をひく者（帰化一世及び二世，三世等）の双方を含むもの」と記され，それが現在の日系人の定義となっている。JICA 横浜海外移住資料館の『海外移住資料館だより（2013年11月)』掲載の二宮正人サンパウロ大学教授によれば，世代別の混血率は，一世のほとんどが日本人同士で結婚したため二世では６％と低いが，世代が下るとともに上昇し，五世の混血率は80％を超える。一世人口が約５万人へと減少する一方で，ブラジルで少しでも日本人の血が入っている人の数は300万人を超えると推計されている。

徳島県からブラジルに移住した人は戦前戦後を通じて約1,300人に上るといわれるが，同県は全国的には最も少ない都道府県の一つである。戦後に限ってみても，国際協力事業団（JICA；現国際協力機構）の『海外移住統計（昭和27年度～平成５年度)』によれば，徳島県から戦後ブラジルに移住した人は計229人で，都道府県別では滋賀県（128人），鳥取県（204人），富山県（211人），岩手県（223人）に次いで５番目に少ない。日本からブラジルへの戦後移住の最盛期は1954（昭和29）年～1961（昭和36）年ごろであった。

この，戦後移民最盛期が終わりに差し掛かる1960年に19歳でブラジルに移住した徳島県板野郡吉野町（現阿波市吉野町）出身の藤岡英吉氏が後に日系人の多く住むサンパウロで阿波おどりの連を立ち上げることになる。ちなみに1960年に日本全国からブラジルに移住した人数は6,832人で，移住形態の内訳は「農業」が6,691人，「技術」が123人，その他が18人となっている。

2）日系コロニアで継承されている郷土芸能と阿波おどり

移民の増加につれて現地で発展した日系人の集住地やコミュニティは「日系コロニア」と呼ばれる。コロニア（Colônia）は英語の colony に相当するポルトガル語であるが，ブラジル全土に分布する日系人集住地や日系コミュニティ，あるいは日系社会を指している。ブラジルでは日系人が多く住むサンパウロ州とくにサンパウロ市に同国最大の日系コロニアが形成されており，そこを中心に日本各地の伝統芸能活動が継承されている。表１は，サンパウロ市で発行されている邦字紙ニッ

ケイ新聞が2003年８月に「日本文化を踊ろう！―ブラジルに生きる郷土芸能―」という９回連載の特集で取り上げた伝統芸能活動の９事例である。

ここで取り上げられている９事例の他にも，数多くの日系団体がブラジル国内各地で芸術活動に携わっている。2009年６月30日付のニッケイ新聞によれば，選りすぐりの日本芸能団体が総出演する「芸能の祭典」である，この年の第44回コロニア芸能祭では，２日間にわたり民謡や舞踊，洋舞，太鼓，琴和楽など121の出し物が披露され，約５千人が来場する賑わいを見せた。レプレーザ連の総勢50人による徳島名物阿波おどりが披露されると，会場は立ち見が出るほど大勢の観客で埋め尽くされた。また，サンパウロ市で戦後邦字紙として初めて創刊されたサンパウロ新聞の2016年８月22日付「本紙創刊70周年を記念　コロニア芸能界が贈る記念ショー」によれば，27団体約350人のコロニア芸能界関係者が出演し，熟年クラブ連合会コーラス部による「青い山脈」の合唱を皮切りに，大正琴，体操，踊り，日本舞踊，居合，琉球舞踊，太鼓，邦楽，琴，民謡など約30演目が披露された。このショーの最後の大トリもレプレーザ連による阿波おどりが締めくくっている。

参考に，2019年３月21日付のニッケイ新聞によれば，サンパウロ人文科学研究所がブラジル国内各地の日系文化体育協会436団体を対象に実施した「日系社会実態調査」の結果，全ブラジルで約２千人以上を動員する日系団体主催の「日本祭り」的イベントが88件も開催されており，盆踊りも138件行われていることが分かった。また，「日本祭り」的イベント88件のうち市の公式行事に認定されているものが約３割あり，日系団体が地域

表１　ブラジルで伝承されている日本の伝統芸能の事例

伝統芸能	実践主体
沖縄県の「琉球国祭り太鼓」	サンパウロ市の沖縄県人会館で毎週火曜日午後７時から練習している。現在メンバーは160人，平均年齢は17歳。伝統芸能のエイサーをベースに空手の型を取り入れたのが特徴。
長崎県の「皿踊り」や北海道の「南中ソーラン節」など	サンパウロ州のリベイロン・ピーレス日伯文化協会のグループ民舞に所属する７歳から25歳の約40人が日本各地の郷土芸能の踊りを練習して披露している。
福岡県の「川筋太鼓」	サンパウロ州のサンベルナルド・ド・カンポ市にあるアルモニア学園でJICAシニアボランティアの指導のもと５歳の子どもから40代の親たちまで約80人が学校の講堂で練習している。
広島県北部の「神楽舞」	サンパウロ市にある広島県人会の文化部活動の一環として15人で始め，現在メンバーは９人，平均年齢は約72歳。かつては女性は参加できなかったが，今は女性神楽団が活躍している。
島根県の安来節で踊る「どじょう掬い」と「銭太鼓」	サンパウロ市にある島根県人会で毎週金曜日の夜に青年部の若者10人ほどが集まって，安来節にのせて踊る「どじょう掬い」と安来節の余興の「銭太鼓」に取り組んでいる。
鳥取県の「傘踊り」	サンパウロ市にある鳥取県人会で毎週金曜日の午後に50人ほどで練習しているが，メンバーの大半は友人の紹介で入っていて鳥取とは関係がない。
新潟県の「佐渡おけさ」	サンパウロ市にある新潟県人会から依頼を受けた日舞の先生が，毎週月曜日と火曜日に２か所で行っている日舞の稽古の中で，毎年７月の日本祭りに向けて佐渡おけさの練習をしている。
山形県の「花笠踊り」	サンパウロ市にある山形県人会の会館で毎週水曜日の午後に一世から三世までの婦人たちが30人以上集まり，和気あいあいと踊りを楽しんでいる。ブラジル各地に愛好者がいる。
徳島県の「阿波踊り」	サンパウロ市にあるレプレーザ文化体育協会の会館で毎週金曜日の午後９時ころから三，四世の６歳から26歳が主体の約50人が阿波踊りに取り組んでいる。

（出典）ニッケイ新聞2003年８月連載「日本文化を踊ろう！―ブラジルに生きる郷土芸能―」

社会から高い評価を得て影響力を及ぼしている様子が浮かび上がった。会場の多くは日系団体の会館で，地域の非日系人も参加する場合が多い。このような「日本祭り」的イベントの中でレプレーザ連の阿波おどりのような日本の伝統芸能の公演が期待され，よく披露されている。

ブラジルで継承されている数多くの日本の伝統芸能の中でも，徳島県の阿波おどりは，代表的な民族芸能の一つに位置づけられている。2016年９月28日付ニッケイ新聞は，ブラジルの主要日系団体の一つであるブラジル日本文化福祉協会の国際民族舞踊委員会主催による「第45回国際民族舞踊祭」の様子を次のように伝えている。各国移民の子孫など23カ国33団体の出演者約１千人が自国の伝統舞踊を披露し，来場者数は２日間で2,500人を数えた。日本についてはレプレーザ連が徳島の阿波おどり，レキオス芸能太鼓が沖縄舞踊を発表した。レプレーザ連は30人のダンサーを男女に分け，女性陣の艶やかな踊りと男性陣の激しい動きで会場を席巻し，また，全員が手に持った扇を合わせブラジル国旗，日本国旗を見せ会場から大きな拍手と歓声を浴びた。

Ⅱ　レプレーザ連の誕生と発展

１）レプレーザ連の誕生（1970年代～80年代）

サンパウロ市中心部から南西方向の郊外にグアラピランガ湖（Represa Guarapiranga）があり，その近くの日系人が集まって住む地区の自治会組織（日本人会）として「レプレーザ文化体育協会」がある。阿波おどりレプレーザ連（Grupo Awao-dori Represa）は，徳島県から1960年に19歳でブラジルに移住し，この地区で機械モーター修理工場を営んでいた藤岡英吉氏が，同じく両親が徳島県出身の日系二世の妻ミチエ（三千恵）さんとともに，1972年ころから「レプレーザ文化体育協会」の会館で子どもたちに阿波おどりの指導を始めたことに由来する。サンパウロ市中心部にある日本人街ないしは東洋人街と呼ばれるリベルダーデ地区の広場で行われる七夕祭りなど日本のお祭りには，レプレーザ会館で指導を受けたちびっ子たちを中心とした男踊りが参加し，徳島県人会の婦人たちによる女踊りとともに一つの連として阿波おどりを披露していた。1970年代から80年代にかけては，このような活動が主で，当初から「レプレーザ連」という名称の連が存在していたわけではない。長井アメリア連長によれば，グループの名前を連として紹介する場合に使われ始め，定着していったようである。

２）１年間の活動休止と活動再開（1990年代）

レプレーザ連は，1990年頃に，連員間の意見の相違から活動を１年間休止するに至ったことがある。長い目で見れば，これは連にとって必要な休みの期間であり，活動再開後には，連員間の団結は以前に増して強まったという。

活動再開後の３カ月ほどの間，徳島県出身でブラジルに来ていた踊りの心得のある原夫妻がレプレーザ会館で阿波おどりの指導に当たるという機会があった。それまで女踊りの指導ができる人がいなかったが，原夫人の本場仕込みの指導によってこの時期に「女踊りがとてもよくなった」（長井連長談）とのことであった。自分の娘が阿波おどりを習っていて，最初は付き添いだった長井アメリア現連長は，このころには藤岡夫妻と一緒に踊るようになっている。

1995年夏には，阿波おどり発祥の地である徳島へ第１回の文化交流訪問が実現した。徳島県の招待で30名の踊り手が徳島を訪問し，レプレーザ連の名前が入った衣装で「とくしま連」に加わって徳島市の阿波おどりに参加した。連員たちは二人組のペアになって関係者の家庭にホームステイすることになり，長井アメリア氏は藤岡夫妻とともに，当時吉野町で酒店を営んでいた英吉氏の叔父宅である藤岡家に宿泊した。徳島市内の美容院の２階の家にホームステイしていた年少の女子連員２人のうちの１人がホームシックで泣き出してしまったため，世話役の長井氏は夜に吉野町から徳島市のほうまで往復したというエピソードもあった。

3）連長の引継ぎとレプレーザ連の発展（2000年代以降）

藤岡英吉氏の機械モーター修理工場は，お金をかけて修理して使う時代から買い替えた方が早いと考える時代への変化もあり，業績が振るわなくなっていた。藤岡氏は2000年から日本に出稼ぎに行くことになり，同氏がいなくなった後もレプレーザ連を存続させるために，長井アメリア氏が週末に日本語を教えていたコロニア・アレマン（通称コロニア）の日本人会の子どもたちにも阿波おどりへの参加を呼びかけることになった。サンパウロ市最南部にあるコロニアはレプレーザ会館から車で1時間ほどかかるが，レプレーザ会館での練習にコロニアの子どもたちも参加するようになった。

日本へ働きに出た英吉氏に代わって，ブラジルに残ったミチエ夫人が一人でレプレーザ連の面倒を見ることになり，連員たちはミチエ夫人と力を合わせて連の運営に当たった。その後，公演で音響を担当していた森氏が連長役を引き受けることになった。ところが，その森氏が連長に就任する直前に病気で急に亡くなってしまったのである。その結果，2003年から長井アメリア氏が連長役を引き継ぎ，吉田照美氏が連絡調整係を務めるなどして，存続の危機を乗り切った。

2004年には，レプレーザとの関係がしばらく途切れていたコロニア日本人会と再び連携して，新たなエネルギーが加わった。現在指導的立場にある中釜ユキエ氏もコロニアの出身で，サンパウロ市中心部およびレプレーザ会館により近い長井連長宅に寄宿し，学校に通いながら阿波おどりの活動に取り組んできた。それは社会人となって職場に通う今日も続いている。

2008年には，サンパウロ市アニェンビのカーニバル・サンバパレード会場で日本からブラジルへの移民100周年記念式典が開催され，レプレーザおよびコロニアのほか，カザ・グランデ，昭和，アセンザ，サウーデ，サンタナといった各地の日本人会から踊り手240人が集まって阿波おどりを披露した。翌2009年には，サンパウロでブラジル徳島県人会創立50周年記念式典が開催され，これに出席する徳島県の慶祝団員として娯茶平の岡秀昭連長と女踊りの入江美樹さんがブラジルを訪問し，祝賀会に加えてレプレーザ会館での練習にも参加し，通常の練習時間を大幅に超えて本場の阿波おどりの指導を行った。

2011年８月に，第２回の徳島訪問団として連員８名が「とくしま連」に加わって徳島市の阿波おどりに参加した（写真１参照）。さらに翌年の2012年７月には，第３回の徳島訪問団として連員５名が娯茶平の練習に参加した。

2003年頃にはすでに「いまや日系イベントのアイドル的存在」（ニッケイ新聞）となっていたレプレーザ連は，近年では，サンパウロ州内をはじめブラジル国内各地で開催される日系の各種イベントに招待されて阿波おどりを披露する機会が多くなっている。毎年７月にサンパウロ市で日本（郷土）祭りが開催されているが，2018年の同イベン

写真１：2011年８月，徳島市の阿波おどりに参加したレプレーザ連のメンバーたち。前列中央でプラカードを抱えているのは，長年にわたりレプレーザ連を物心両面で支援してきた尾形光俊氏。尾形氏から右へ歴代のブラジル徳島県人会長の原田 昇氏（在任：2002～2012年，2019年～現在），粂 恵子氏（2012～2017年），大原勝美氏（2017～2019年）。（レプレーザ連提供）

トでは日本から皇室の眞子様をお迎えして「ブラジル日本人移民110周年記念式典」が行われた。この式典において，日系コロニアを代表する二つの踊りの一つとして阿波おどりが選ばれた。もう一つは琉球舞踊で，ブラジルへの移民が日本の都道府県の中で最も多い沖縄県の伝統芸能である。

レプレーザ連の選抜メンバー65名は，グループ民による生演奏の鳴り物とともに阿波おどりを披露した。グループ民は，サンパウロを拠点に日本の民謡を三味線，笛，和太鼓などの伝統楽器で演奏するグループで，普段演奏している楽器の一部を鉦など阿波おどり用に持ち替え，事前に鳴り物の練習をして，本番に臨んだ。

2018年８月には，第４回徳島訪問団としてレプレーザ連の将来を担う若手を中心に13人の踊り手が阿波市の「あわ阿波おどり」と徳島市の阿波おどりに参加し，本場徳島の阿波おどりを肌で感じる体験を通して，今後ブラジルで阿波おどりをさらに発展させたいという気持ちがより確かになったようであった。令和新天皇の即位を国内外に宣言する「即位礼正殿の儀」が2019年10月22日に日本の皇居・宮殿で行われたことを受けて，同日夜にブラジルの日系主要５団体による「『即位礼正殿の儀』奉祝晩餐会」がサンパウロ市で開催された。このイベントでもレプレーザ連に公演依頼があり，いつもながら見応えのある阿波おどりを披露した。

レプレーザ連は藤岡英吉連長の時から，手に持った大きな扇で日本とブラジルの国旗の模様を作るなど見栄えのする演出を踊りに加えることに前向きであり，ブラジル各地で披露する公演での演出面の工夫には目を見張るものがある（写真２および３参照）。しかし，その一方で鳴り物は録音で踊っており，より本格的な連として自前の鳴り物で公演を行うことが目標となっていた。2018年の徳島訪問以降，鳴り物の和楽器の練習を開始し，2019年の世界阿波おどりサミットに参加するために来日した機会には，有名連「うきよ連」の協力を得て鳴り物演奏のお手本を動画に記録させてもらった。そして翌月の12月には，サンパウロ市中心部で開催された東洋祭りで初めての自前の鳴り物（鉦，大太鼓，締め太鼓，笛）による屋外公演を披露するに至った。なお，レプレーザ連はインターネット上で積極的に情報を発信しており，公演などの様子を動画で見ることができると同時に，問い合わせや新たなメンバー募集などの窓口にもなっている。

写真２および３：レプレーザ連の公演から。招待されたイベントへの祝辞の演出や日本とブラジルの国旗の模様を作る演出などで，観客にアピールしている。
（出典：レプレーザ連 Facebook）

Ⅲ　レプレーザ連の発展の要因

１）創始者・藤岡英吉氏（1941～2012年）の生い立ちと人物像について

ブラジルに渡る前の藤岡英吉氏と阿波おどりの関わりに関する詳細な情報はないが，1941（昭和16）年生まれの藤岡氏が故郷徳島で子ども時代を過ごした戦後復興期の地域社会の状況からある程度の推測は可能である。

戦時中に一時途絶えていた阿波おどりは戦後に復活し，徳島市の演舞場でお盆に踊られる以外に

も，県内各地で踊られる地域の伝統文化として盛んに広まった。阿波市でも，町や地域ごとに役場連や青年団の連がつくられ，お盆には店先や町筋を練り歩いたり，神社の境内で踊ったりした（吉野町史（下巻），市場町史，阿波町史）。また，お盆以外でも景気づけや婚礼などの祝い事の席でも皆で踊ることがよくあった。藤岡氏とほぼ同年代で隣の土成町で育ち現在は阿波市の龍虎連の連長をしている富杉眞二氏によると，「この辺の婚礼では，花婿側の手伝いの近所の人が，少し手前で待っている花嫁を阿波おどりで迎えに行き，踊りながら案内して花婿の家に連れてくる習慣がありました。鳴り物は料理屋の芸者さんの三味線と締め太鼓，格好は皆それぞれに浴衣を羽織ったり配られたタオルを鉢巻きにして，にぎやかに迎え入れたものです。また，棟上げやお酒が入る宴会では，だいたい皆の気持ちがはずんでくると，阿波おどりを踊っていました。」このような中，阿波市吉野町に育った藤岡英吉氏にとっても，阿波おどりが身近な存在であったことは想像に難くない。自身も阿波おどりを踊ったり，見たりする機会が十分にあったと思われる。

英吉氏の母親が若くして他界したため，英吉氏は吉野町の中心商店街で商家を営む叔父の藤岡正行氏に引き取られることになった。県立工業高校を卒業し，電気・モーター分野の技術を身に付けた後，19歳でブラジルに渡る決心をする。1960年のことである。ブラジルに渡ってからは，サンパウロ市内の南西部郊外のサント・アマーロ地区で機械モーターの修理工場を経営することになった。この地区の日本人会であるレプレーザ文化体育協会の構成メンバーとなり，後に会長となる。また，ブラジル徳島県人会の副会長も務めたことなどからも，社交性の高い人物であったことがうかがえる。

藤岡氏は阿波おどりを教えていた子どもたちに，チャンスがあったらそれを逃がさないように掴むことが大切だ，という話を口癖のようによくしていた（長井連長談）。けれども同氏のポルトガル語があまり上手ではなかったため，子どもたちはそのぎこちないポルトガル語を面白がって，よく真似していたそうである。このエピソードからも，自分の経験から学んだことを後輩に伝えようとする積極的な姿勢と，子どもたちからも好かれる親しみやすい人物像が浮かび上がる。

英吉氏にとっては育ての親のような存在となった叔父の息子の息子（従甥：いとこおい）に当たり，英吉氏が引き取られた吉野町の商家で育った藤岡知寛氏によれば，ブラジルから故郷の吉野町に里帰りしていた英吉氏は，ブラジルの良いところをいろいろと話してくれて，後ろ向きの発言は聞かれなかったという。刺激を受けた知寛氏は，英吉氏がブラジルに渡った時と同じ19歳のころ，英吉氏を頼ってブラジルを訪問し，ブラジル人の生活を身近に体験するために英吉氏の家以外でもホームステイをしている。知寛氏の話からも英吉氏の前向きな人物像が伝わってくる。

ブラジルに渡ってから10数年となる1970年代に，サンパウロ中心部で行われた日本のお祭りで徳島県人会として阿波おどりを披露しており，そこに参加することが直接の動機となって，英吉氏はレプレーザ日本人会の子どもたちに阿波おどりの手ほどきを始めたのではないかと思われる。「芸は身を助ける」ということわざは，趣味で覚えた芸が，思いがけないときに役に立つことがあるというたとえであるが，英吉氏は自分の身に付いていた阿波おどりの芸を遠くブラジルで子どもたちへの文化継承・教育の意味も込めて活かして連を立ち上げることを決意したのではないか。その結果として，レプレーザ連は幾度の存続の危機を乗り越え，故郷の伝統芸能が海外で継承されることになったのである。

英吉氏はミチエ夫人とともに1995年にレプレーザ連を引率して徳島を訪問しており，故郷に錦を飾る凱旋帰国を果たしたといえよう。2000年に出稼ぎで単身愛知県に行き，その後ミチエ夫人も日本に渡るが，英吉氏は2012年に愛知県で亡くなり，ミチエ夫人はブラジルに帰国してその数年後に亡くなっている。

2）中興の指導者と次世代の担い手

藤岡英吉氏が2000年にブラジルを離れた後，レプレーザ連の存続と発展を支えたのが，藤岡氏を間近に見てきた連の重鎮，長井アメリア氏である。長井氏は仲間たちと協力し，ミチエ夫人の助力も得て，英吉氏が阿波おどりにかけていた情熱を汲むようにレプレーザ連存続に尽力した。

長井氏は，1948年ブラジル生まれの日系二世で，両親は山口県出身であったが，レプレーザ文化会館の活動を通して阿波おどりに出会った。当初は踊りを練習する娘の保護者として，しばらくしてからは踊り手として，そしてその後は世話役として運営に関わってきた。職業は長年にわたり高校の数学教師を務め，かつ週末の日本語学校の教師も兼任してきた日系コミュニティの「先生」であり，厳しくも優しく指導に当たり，子どもや若者に親しまれ人望を集める人物であった。長井氏は日本語を教える子どもたちに阿波おどりの練習への参加を促し，連員を確保することにも貢献してきた。

この長井氏とともに連を支えてきた保護者の中には喜んで公演の送迎や連の活動を支えるという人が幾人もおり，また，これまで指導し面倒を見てきた子どもたちが青年層になって，連の中核を担うようになっている。今では長井連長を支える右腕的存在の中釜ユキエ氏やレプレーザ連のwebサイトを管理する井上ファビアナ氏をはじめ，10年以上活動している中堅の指導者的存在の人材が育っている。公演の依頼が平日の場合など，参加できるメンバーを集めるのに苦労することもあるが，長井氏から声をかけられれば，なんとか都合をつけて参加してくれるメンバーもいるとのことである。

年末には普段の練習への参加率が最も高かったメンバー数人に，長井連長から気持ちを込めて記念品を渡して表彰するそうである。そのような連員に対する気配りも，連の雰囲気づくりに大いに貢献している。青年層の連員たちは「私たちは大家族」と言い合いたいへん仲が良い。このように連員たちが感じるような団体を作り，若手リーダーたちを育て上げた長井氏の手腕もまた，レプレーザ連の発展の要因であったといえよう。この長井氏の教え子を中心とした若手リーダーは，今後の担い手としての自覚をもって既に連の様々な役割を担っている。

図1：レプレーザ連のエンブレム。デザインの勉強をしている連員が二人いて，そのうちの一人が制作したもの。頭部は黄色，上半身は緑色，下半身は青色とブラジルらしい色彩を使用している。
（出典：レプレーザ連 Facebook）

3）連員にとっての意味と問題意識

2018年夏の来県時に，筆者らが実施したレプレーザ連メンバーへの意識調査の結果からは，連員にとっての阿波おどりの意味として，次のようなものが浮かび上がった（萩原・稲井，2019）。

一つ目は，阿波おどりは連員にとって「日本文化を表すもの」，「日本とのつながりを強化するもの」であり，日系人が日本文化を維持し，エスニック・アイデンティティを保持するための手段の一つとして機能している。二つ目として，阿波おどりは多くの連員にとって「第二の家族」，「阿波おどり家族」を意味しており，阿波おどりに取り組む連，すなわち集団全体が，互いを助け合う大きな家族のような共同体として機能している。三つ目として，阿波おどりは「学び」，「経験や成長」を得るものとして認識されている。練習での自己鍛錬，集団作り，公演や遠征などの連の活動は，これらを通じて人間的成長をはかる青少年育成の

過程でもある。

これらの積極的な意味から，現地レプレーザにおいて，阿波おどりは連のメンバーそれぞれにとって価値ある活動だと認識され，真剣に取り組まれてきたといえる。連の創設者である藤岡英吉氏の血を引く者，徳島県以外の出身者の子孫だが日系のルーツを持つ者，自身は非日系だが日系の友人の縁で阿波おどりを始めた者など，立場によって阿波おどりに対する考え方や自分にとっての意味は必ずしも同じではないが，共通の帰属感や仲間意識を抱いているようである。なお，近年の海外における日本文化への関心の高まりを背景としてか，非日系の若者も，日本文化を表す活動としての阿波おどりに興味をもち，連の活動に参加している。

4）徳島との交流

発展を促す要素として，もう一つ見逃せないのが阿波おどりの本場徳島との交流である。レプレーザ連は徳島県人会の連に貢献する形で生まれたが，その後徳島県人会とは別に発展した。それでもレプレーザ連はこれまで幾度にもわたって徳島県人会との関連で徳島からの指導者による指導を受けたり，浴衣や小道具などを譲り受けたりしている。また，数年ごとに徳島を来訪し，市内の演舞場に踊り込んだり有名連の指導を受けたりしている。これらの機会は，連員のモチベーションアップと技術的向上に結び付き，その後の連の発展につながっている。2018年夏および2019年秋の徳島来訪では，鳴り物の習得と楽器類の補充を実現し，2019年12月には連として自前の鳴り物を披露するという念願の課題をクリアした。こうした徳島との交流を，うまくさらなる飛躍のきっかけとすることができているのも，レプレーザ連発展のカギといえるだろう。

ここで，尾形光俊徳島ブラジル友好協会名誉会長のレプレーザ連への思いにも言及したい。自身ブラジルへの移住を経験し，自他ともにブラジルびいきを認める尾形氏はまた，かつて殿様連に属していた阿波おどりの愛好者でもある。同氏はブラジルで阿波おどりを実践するレプレーザ連をことのほか気にかけ，これまで物心ともに多大な支援を続けてきた。その一方で，派手なパフォーマンスを見せてブラジルで躍進するレプレーザ連が本場の踊りからかけ離れていっているのではないかと懸念していた。そのため，レプレーザ連が来徳する機会には本番の阿波おどりに参加するだけでなく，事前の有名連の練習にも参加できるように腐心してきた。レプレーザ連を本格的な連となるように育てたいという気持ちを持っていたのである。尾形氏に限らず様々な関係者による支援もレプレーザ連の飛躍の一要因といえよう。

まとめ

以上，レプレーザ連の設立から今日までの足跡を振り返ったうえで，その発展の要因を考察してきた。そこから見えてきたのは，第一に，創始者の思いとそれを受け継ぐ人々の存在である。偶然にも左右されたとはいえ，徳島出身の藤岡英吉氏が連の活動を立ち上げたこと，それを受け継いだ長井アメリア氏の奮闘があったこと，またそこから新たな担い手が育っていること，こうした優れたリーダーに恵まれたことが，成長のカギであった。

第二に，大家族としての「連」という認識に表されるように，連の構成員が日系アイデンティティを確立する過程として，連の活動が寄与してきたことが挙げられる。日本文化を表す「阿波おどり」は日系コミュニティの団結にとって有用であり，青少年からなる構成員にとっても良き日本文化の象徴のような活動であると認められてきた。その要請に応えるような活動の実践と連の運営を，上記リーダーたちが成功させてきたといえる。

第三に挙げられるのが，阿波おどりの本場・徳島とのつながりである。成長のきっかけに，レプレーザ連は徳島からの指導者を迎え指導を受けたり，逆に徳島に遠征したりして交流してきた。技術の習得や物品の調達といった直接的な利便はもちろんのこと，有名連から直接教えを受けた，あ

るいは桟敷に踊りこんで拍手を受け本場で承認されたという事実は大きい。それは連員の確かな自信やモチベーションアップにつながり，活動継続の大きな支えになったことは間違いないだろう。

このレプレーザ連の発展の過程は，徳島以外の遠隔地で活動する連に示唆を与えるものである。連員数の確保に苦労している海外の連，ひいては本場徳島の阿波おどり全体にとっても，一つの刺激的な事例といえるのではないだろうか。

参考文献

1）外務省領事局（2002）:『海外在留邦人数調査統計』

2）JICA 横浜海外移住資料館（2013）:『海外移住資料館だより第31号（2013年11月)』

3）国際協力事業団（1994）:『海外移住統計（昭和27年度～平成５年度)』

4）中釜ユキエ・長井アメリア（2019）:「阿波おどりレプレーザ連―ブラジルでの設立から今日までの軌跡－」

5）萩原八郎・稲井由美（2019）:「ブラジルにおける阿波踊りの今日的な意味」，四国大学経営情報研究所年報第24号，pp. 1～13。

6）サンパウロ新聞2016年８月22日付「本紙創刊70周年を記念　コロニア芸能界が贈る記念ショー」

7）ニッケイ新聞2003年８月14日～27日付「日本文化を踊ろう！―ブラジルに生きる郷土芸能―」（９回連載）

2009年６月30日付「ブラジルの日本芸能一堂に＝文協＝第44回コロニア芸能祭＝舞踊や民謡，120演目＝２日で５千人来場」

2016年９月28日付「文協＝各国の伝統文化継承の場に＝第45国際民族舞踊祭＝ウクライナ移住125周年を祝う」

2019年３月21日付「人文研調査＝全伯で日本祭り88，盆踊り138＝「会館拠点に日本精神発信」＝地域社会で親日感情を醸成」

8）レプレーザ連 Facebook（https://www.facebook.com/awaodorirepresabrasil/）

9）読売新聞徳島支局編（1974）:『阿波おどり物語』

10）徳島県板野郡吉野町史編纂委員会（1978）:『吉野町史下巻』

阿波町史編纂委員会（1979）:『阿波町史』

市場町史編纂委員会（1996）:『市場町史』